



◆当面する重点作業・技術

1. 病害虫防除・雹害等気象災害対策のため、袋かけを早期に終了させる。(情報No.7 参照)
2. 梅雨明け後は、高温による急激な土壌水分の変化で樹が弱るため、計画的なかん水を実施し、水分ストレス(葉焼け・裂果・着色不良・粒伸び不足・成熟遅延)の予防をする。
3. 副梢の発生が多く棚面が暗い園は、適正な新梢管理を徹底する。
4. 裂果対策を徹底する。発生した場合は一部袋内を確認し、ひどいものは速やかに摘粒し被害軽減(カビ)をする。

◆第11回薬剤散布について(前回散布14日以内)

1. 散布時期：前回散布2週間以内(晴天が続いても20日以上空けない) 散布日 月 日
2. 調合量：水1000ℓ当り ※混用順に記載

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
ICボルドー66D	2kg	べと病・さび病・黒とう病(褐斑病)	—
固着性展着剤K・Kステッカー (必ず最後に調合する)	33ml	—	—

3. 散布量：10a当り ⇒SS・動噴＝350ℓ

4. 留意事項

- ①カイガラムシ類の発生が多い園は、トランスフォームフロアブル 2,000 倍(水 100ℓ当り 50mlを加用散布する。散布の際は、主幹・主枝・特に芽座にしっかりとかける。

◆第12回の薬剤散布について

1. 散布時期：前回散布14日以内 散布日 月 日
2. 調合量：水1000ℓ当り ※混用順に記載

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
ICボルドー66D	2kg	べと病・さび病・黒とう病(褐斑病)	—
固着性展着剤K・Kステッカー (必ず最後に調合する)	33ml	—	—

4. 留意事項

- ①ブドウトラカミキリの発生が心配される場合は、アルバリン顆粒水溶剤 2,000 倍(水 100ℓ当り 50ml・収穫前日まで)を加用散布する。

【第11・12回薬剤散布共通留意事項】

3. 散布量：10a当り ⇒SS・動噴＝350ℓ

4. 留意事項

- ①散布間隔を空けずに、定期的に棚上まで十分散布する。
- ②icボルドー66Dに代えて4-4式ボルドー液(生石灰 400g、⑩硫酸銅 400g)を使用しても良い。
- ③固着性展着剤K・Kステッカー3,000 倍に代えて固着性展着剤アビオンE1,500 倍(水 100ℓ当り 66ml)を使用しても良い。使用の場合は最初に調合する。
- ④ボルドー液は他の作物(果樹・野菜・花等)にかからないよう注意する。
- ⑤スリップスの発生が心配される場合は、第11回又は12回にアーデントフロアブル 2,000 倍(水 100ℓ当り 50ml・収穫前日まで)を加用散布する。

◆クビアカスカシバの対策について

1. 7月下旬以降より虫糞排出が目立ち始めるので、発見したら幼虫を捕殺する。スプレー式殺虫剤ロビンフット（収穫前日まで・年間5回まで）を使用してもよい。
2. 再発が多いので、過去発生した園や樹は特に見回る。

◆うどんこ病について

うどんこ病にかかると果実の果面に白い粉がつき時間が経つとサビになる。うどんこ病とべと病は間違えやすいので注意。べと病は軸や果実の付け根に発病をする。

◆苦土欠乏対策について（種無し・種あり共通）

枝の伸びが良い場合は、元葉の色がうすくなりやすいので施用して葉色を良くし、着色・糖度を向上させる。また、欠乏症がやすい短梢栽培では、土壌施用だけでなく、積極的に葉面散布を実施したい。

1. 葉面散布：引き続きに定期防除に加用散布する。

肥料名	散布量
グリーントップ70	500 倍（水 100ℓ 当り 200 g）
リーフマグ	1,000 倍（水 100ℓ 当り 100 g）

◆縮果症について

1. 症状：粒の果皮直下が褐色～茶色に変色し凹む。
2. 要因：梅雨から梅雨明け後の急激な温度変化と土壌水分の変化により、吸水と蒸散のバランスが崩れた結果や、副梢整理を極端に行う事で発生する。
3. 対策：排水とかん水を適切に実施すると共に、副梢切除をこまめに行い、急激な養分転流や競合を抑える。

※縮果症発生する部位は、毎年（樹や主枝単位）出る可能性があるため、翌年の管理に注意するため、目印をつけておく。

◆日焼け防止用傘紙の除去について

日焼け防止に使用した新聞紙は着色期(色が出揃った頃)に入ると不要になるので、着色している房から除去する。

1. 除去する時間帯は、午後2時～4時頃で果実温の高い時に実施する。
2. 遅れないように外していく。ただし、乳白のワンタッチポリ傘は外す必要はない。
3. シャインマスカットは収穫まで外さなくても良い。
4. また枝が茂っていない場所では日焼けが心配されるため、高温時期を過ぎてから行う。

※鳥獣害の心配がある場合は除去しない。

◆かん水について

土壌水分が不足すると樹体の水分ストレスが発生して、老化(過熟)現象が促進され房枯れ・脱粒障害を起こしたり小粒・小房となる場合がある。

このため適度なかん水が必要であり、特に毎年穂軸が早くから黄変する園では、早目に対策を行う。

1. 高温乾燥が続く限り成長維持のためにかん水が続ける。
 - ①果粒軟化期以降は、少量多かん水。たっぷりとするのではなく、1回5mm程度を3日置に行う。
 - ②降雨があれば、状況に応じ1回分を休んでもよい。
 - ③かん水の切り上げは収穫の7日前を基準とするが、高温干ばつが続く場合は収穫中にも軽く散水を行うとよい。

※裂果について

- ①一般的な裂果の発生は、糖度12～13%の時に多い。
- ②定期的なかん水ではそう心配はないが、干ばつ以降かん水していない場合は糖度を見極めてかん水する。(盆前の急激なかん水は避ける)

※土壌が乾燥し、ひび割れる前にかん水する。一度に多量のかん水は行わない。

◆ナガノパープル裂果対策について

1. 大房・着果過多による着色遅れが裂果要因になる。

果粒付け根まで早く着色が入るように、大房・着果過多にならないよう、袋掛け終了後でも着果制限を行う。最終的な着果制限の判断は7月下旬に(現地事例より)

 - ①一般的に成熟の遅い、主枝の基部付近の新梢に着房しているものを中心に、果粒の付け根の色を確認する。
 - ②果粒付け根の色が進んでいない(緑色が抜けていない)場合は、着果制限をする事により成熟が進みやすくなり、裂果の軽減になる。
 - ③着果制限をかける場合は主枝の片側ずつで考え、特に成熟(着色)の遅れている房を摘房する。
主枝先端・基部で着房数に多少の偏りが出てしまってもよい。
2. かん水 ※前項参照

◆クイーンルージュ®管理について

1. 縮果症対策：情報No.7を参照に徹底する。
2. 着色管理：副梢の再発生が見られたら、こまめに基部から切除をし、明るさの確保をする。
着房・粒過多は成熟の遅れとなるため、制限をする。情報No.7を参照に徹底する。
3. 病害対策：病害全般に弱い品種のため薬剤散布は、丁寧に行うと共に、黒とう病や晩腐病の越冬源となる巻きひげの除去を行う。

◆種あり巨峰の明るさ確保について

新梢が伸び暗くなっている園は、新梢管理を徹底する。

1. 新梢・果房とも十分光が当たるよう、棚面の暗いところは新梢の整理を行うが、果房上に1枚の葉が乗っている状態で管理する。
2. 二番成りは、晩腐病の発生源となるので巻きひげとともに早めに整理する。
3. 若木・ウイルスフリー樹の新梢整理のポイント
 - ①今年冬の剪定時に不要となる枝(追出枝)や、樹(間伐樹)を優先して整理する。
 - ②冬季間に間引き予定側枝の中で養分を引き込んでいる太い新梢を、7月下旬～8月上旬に切る。
 - ③強くしたい枝は新梢を多く残し、弱めたいものは少なめに整理する。
 - ④植付け1～2年生のウイルスフリー樹は新芽が上下にならないよう丁寧な誘引が重要。
 - ⑤副梢は基部から着房位置までのものはかき取り、伸びの著しい副梢は基部から2～3葉残して切る。ただし、暗くなる場合は全て基部よりかき取る。
4. 強勢なウイルスフリー樹・凍害を受け新梢がかなり旺盛に伸びている樹は、盆直後に基部から葉30～35枚程度で必ず摘心をおこない伸びを抑制し枝の登熟をはかる。(早いと二次伸長する。)これ以降も遅伸びしている新梢(副梢も含む)は全て摘心を繰り返し、枝を登熟させ来年度の発芽率を高める。(摘心は必須作業)